平成11年10月31日（日）

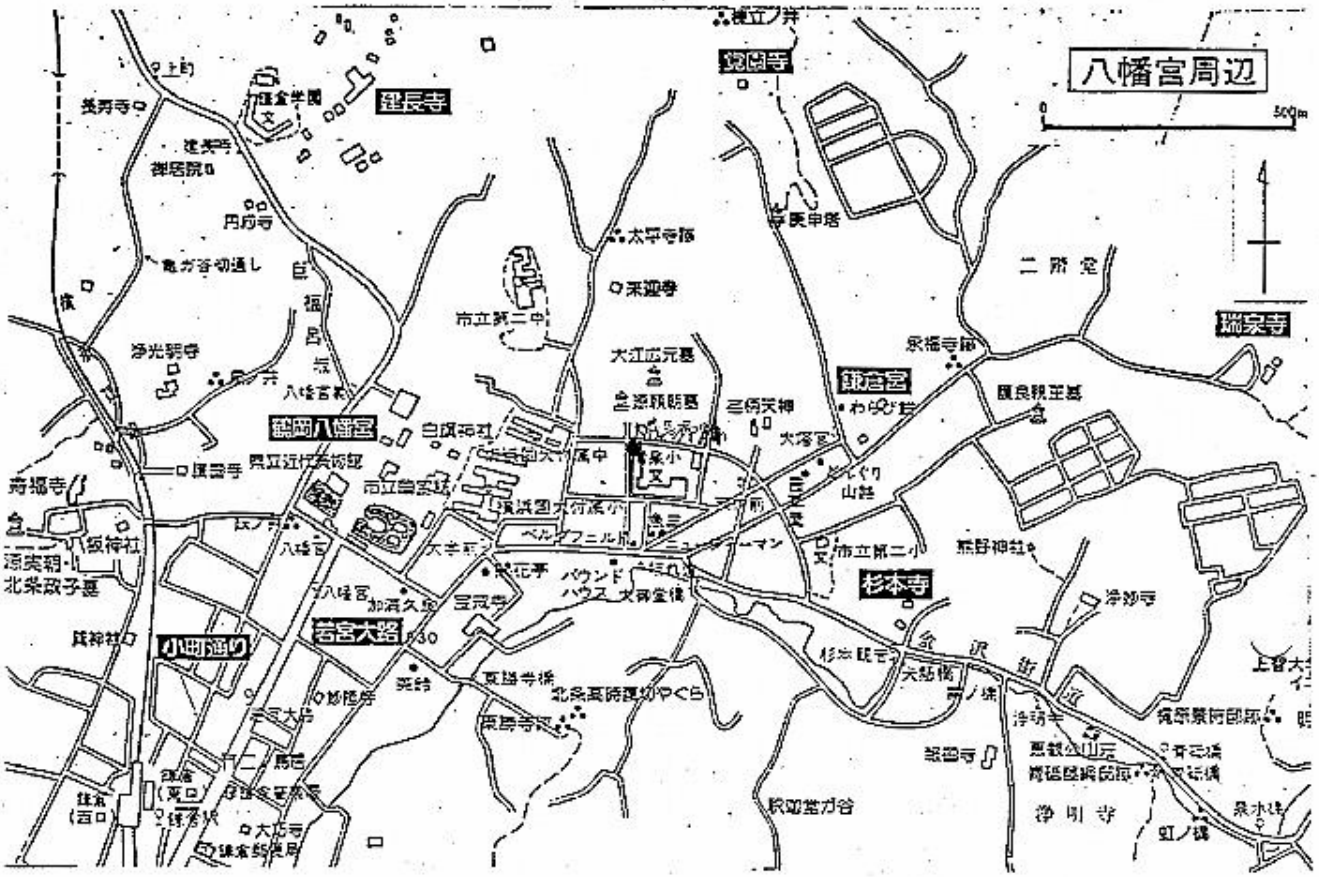
11月7日（日）

第270回　史跡めぐり　資料

秋の鎌倉

没後800年　頼朝を歩く

越谷市郷土研究会



平成11年10月31日（　）

11月7日（日）

第270回　史跡めぐり

秋の鎌倉

没後800年　頼朝を歩く

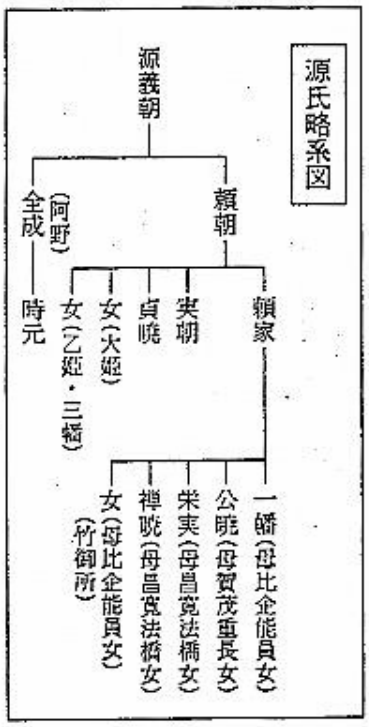
集合　午前8時　JR南越谷駅前

コース　南越谷駅＝南浦和駅＝東京駅＝鎌倉駅…寿福寺（政子・実朝墓）…鶴岡八幡宮…大蔵幕府跡…来迎寺…頼朝墓…荏柄天神…鎌倉宮（昼食）…永福寺跡…瑞泉寺…大塔宮バス停＝鎌倉駅…小町通りお買物…鎌倉駅＝南越谷駅　解散（6時頃予定）

食事　各自持参

参加費　4，000円（交通費・拝観料・資料代）

案内者　幹事・宮川　進



＊寿福寺＊（扇ガ谷一丁目一二番）

鎌倉駅西口を出て直進し「今小路」へ出て北へ四〇〇mほど行ってJR線の線路際に出たところを西へ折れて、二〇〇mほど進むと寿福寺の外門がある。臨済宗建長寺派の寺で亀谷山寿福金剛禅寺という。縁起によれば源頼朝が死んだ翌年の一二〇〇(正治二)年に北条政子が、臨済宗の開祖・明庵栄西を開山として建立したもので、のち足利義満が「鎌倉五山」のうち建長寺・円覚寺に次ぐ第三位に列した。ちなみに第四位は浄智寺、第五位は浄妙寺である。

当時は七堂伽藍に塔頭十四を数えたというが、現在は外門・山門・仏殿・方丈などがあるだけで、山門内の二本の柏槙と宋風禅寺様式の前庭に、わずかに当時を偲ばせるものがあるに過ぎない。なお仏殿は江戸時代中期、一七一四(正徳四)年の再建のもので、また柏槙は鎌倉市指定の天然記念物になっている。

寺宝は、国の重要文化財の指定を受けたものに鎌倉時代後期の「木造地蔵菩薩立像」と栄西著の「喫茶養生記」があり、また「木造栄西禅師坐像」が神奈川県指定文化財になっているほか、幕末二〇年間の「寺務日記」が保存されている。

寺の背後、源氏山山腹の「やぐら」の一つ、「層塔やぐら」という彩色された岩窟内には源実朝の五輪塔があり、それと並んだ岩窟に伝・北条政子墓の五輪塔がある。また墓地には俳人・高浜虚子と作家・大仏次郎の墓がある。

＊明庵栄西　千光祖師といい、はじめ天台宗を学んでいたが、一一六八(仁安三)年、二十七歳のとき、中国・宋に留学して禅を学んで帰ったが、まだ修行の足らないこと感じ、インドへ赴こうと、一一八七(文治三)年、再び中国に渡ったが、目的を達するまでには至らず、中国浙江省の天台山で「臨済禅」を会得して一一九一(建久二)年に帰国した。福岡市香椎宮寺での布教活動のち一一九九(正治元)年、鎌倉に来て、ここ寿福寺を開山、一二〇二(建仁三)年には京都東山に建仁寺を開山したのち、当寺に戻り、一二一五(建保三)年六月五日に、ここで没した。

栄西は臨済宗の開祖であるとともに、日本に初めて「茶」を伝え、「喫茶養生記」で、お茶による健康医学を説いたほか、「建仁寺流」で知られる建仁寺流禅宗建築技術を開いた。福岡市香椎宮寺蔵「栄西禅師像」は彼の真筆で国宝に指定されている。

北条政子　永井路子作　より―――

――雪が笑っている。

と政子は思った。

――おろかな、この私を、雪までが、あざ笑っている……

三浦義村が公暁を討ちとったという知らせは、その夜のうちに、政子の許へも報らされた。彼女は、一夜にして、子と孫を一気に失ってしまったのだ。しかも、その陰では、裏切りに裏切りが重ねられている。（略）

なぜかくも恐ろしい終末を私は味わわねばならないのか。四十余年間、私は夫を、子供を愛しつづけてきた。その間、一夜だって、その人たちの不幸を願ったことがあるだろうか。なのに……。

大姫、三幡、頼家、実朝、そして公暁――。

それらの子供たちは、まるで、指の間からこぼれ落ちる水のように、私のそばをすりぬけ、不幸の弱を見きながら死を急いでいった。これが愛の代償なのだろうか。

――これが私が生きたということなの？　（略）

政子は、いま、自分が、荒涼たる孤独の座に、たったひとりで取残されていることを感じていた。

――私はたったひとりぼっちなのだ。　（略）

鎌倉　三上進作　より―――

実朝の抵抗

日一日と増してゆく北条氏の圧迫の中で、実朝は権中納言・左近衛中将と官位の昇進を望み、異常な早さで位を高めていった。京都側の官打ちという狙いがその実現を容易にしたにしろ、自分で源氏の正統が絶えるとの予感が実朝に官位を望ませたとみるのが一般の見解である。

東国武士の世界から、すくなくとも精神面では離れ、京風公家の生活にあこがれ、ひたすら趣味の世界に溺れこもうとしたのも、みずからの短命をさとったせいであう。武士の女を退け、京都から妻を迎えたのも実朝の精一杯の抵抗であった。実朝の好んだのは、和歌・蹴鞠など、東国武士にとっては苦がゆい、柔弱な公卿好みの遊びである。藤原定家から近代秀歌集や、「万葉集」の写本を贈られると、実朝はなによりも喜んだ。そして、自身「金槐和歌集」をつくる。　（略）

坪内信濃の女

鶴岡八幡宮

御祭神　應神天皇　比賣神　神功皇后
鎮座地　神奈川県鎌倉市雪ノ下二丁目一番三十一号
例大祭　九月十五日

御由緒

建久二年十一月二十一日　丙寅　天晴　風静

鶴岡八幡宮並に若宮及び末社等遷宮なり。和田義盛・梶原景時等随兵を率い、近々並に宮中を警衛す。其の後頼朝（御束帯・帯剣）御参宮あり。北条義時御剣を持ち、御座の傍に候す。（中略）すでに殿内に遷し奉る。多好方、宮人曲を唱し、頗る神慮の瑞相あり。

これは「吾妻鏡」に見える御遷宮の記事である。大臣山の中腹に始めて本宮が出来て、現在のような面目に改まったのはこの時、すなわち建久二年（一一九一）であった。明治以来、この十一月二十一日を当宮の御鎮座の日とし、太陽暦に換算した十二月十六日に、その記念祭を執行し、当時のままに「宮人曲」の御神楽を奉奏している。

しかし、鶴岡八幡宮の歴史は実際にはもっと古く、源頼義の事蹟から始まる。

頼義は康平六年（一〇六三）奥州を平定して鎌倉に帰り、源氏の氏神として、由比郷鶴岡の砂丘に八幡宮をお祀りした。この時丹塗弓・白羽矢など（現在国宝）を神殿に納めた。その子八幡太郎義家も深く尊崇して、社頭の修営につとめている。このような父祖の縁故で治承四年（一一八〇）頼朝は鎌倉に進出すると、まずこの海浜の八幡宮を遥拝し、家運の隆昌を祈り、神意を伺って現在の境内にこの宮を遷座した。これを鶴岡若宮と申した。

頼朝は自分の居所である幕府をこの若宮の東側に構えるほどに、この宮を関東の総鎮守として帰依の心を形にあらわした。だが、建久二年（一一九一）の三月、町屋から火災が起り、社殿も延焼した。頼朝は直ちに大臣山の中腹をけずり、前記の如く上宮を建てて本宮とし、従来の宮のところに下宮を建てて若宮とし、今日のように本宮、若宮を中心にした上下両宮の姿になったのである。当時の文化の粋を関東に移して成就した最初の大事業ともいうべきで、この時以来社頭は面目を一新した。頼朝はこのころすでに天下を治め、鎌倉は事実上京都に並んで政治の中心になっていた。そこで丹誠をこめて崇敬を厚くし、荘厳を尽して国家の宗祀にふさわしく整えたのであった。

このように鶴岡八幡宮は長い歴史ののちに、源頼朝のなみなみならぬ真心によって完成されたのであるが、鎌倉が開けた時から、町の中心に心のより所として奉斎されていたわけである。

鶴岡八幡宮を京都の内裏と同じように仰ぎ、若宮大路を朱雀大路にならって社頭から真直ぐに海岸まで作った。これは表参道であるとともに京都へ向う東海道の基点となり、また、鎌倉の都市計画の基本線となった。

橋の下の細い水路でつながっている池が源平池で、左手（西側）が平家池、右手（東側）が源氏池と呼ばれている。平家池には平家の旗にちなんで赤蓮を、源氏池には同様に白蓮を植えたというが、これは西国の平家、東国の源氏を意識してのものだろう。

平家池には池の面に乗り出すように近代美術館（昭和二十六年竣工）が建てられている。一方、源氏池に浮かぶ小島には蔵上げ弁天社がまつられている。

橋を渡って杉並木の参道を進むと、参道を左右に横切る一条の道がある。毎年九月十六日にここで流鏑馬（やぶさめ）の神事が行なわれるので〝流鏑馬道〟あるいは〝流鏑馬の馬場〟と呼ばれている。

静の舞い　その先の一段高い庭にあがると中央に朱塗りの舞殿がある。源義経の愛妾静が舞ったというのがこの社殿で、下（しも）の宮あるいは若宮とも呼ばれている。

義経が兄頼朝の追及をうけて身をくらましたのち静が捕えられて鎌倉へ連れてこられたのは文治二年（一一八六）二月のことであった。この年四月八日、頼朝は　子とともに八幡宮に参拝したが、その折り政子が、

「かの静という白拍子は今様（いまよう）の上手と聞きます。ぜひ見てみたいもの」

と所望した。静は再三ことわったが、とうとうことわりきれずに一曲舞うことを承知した。工藤祐経が鼓を打ち、畠山重忠が銅拍子をつとめる。頼朝、政子夫妻をはじめ、あまたの御家人たちが見守るなかで静は、

吉野山峰の白雪踏み分けて
入りにし人のあとぞ恋しき
しづやしづしづのをだまきくり返し
昔を今になすよしもがな

と、吉野山で別れ別れになった義経への恋慕の情をこめて歌い、かつ舞った。その美しさ、見事さに万場は水を打ったように静まり返った。

ところが頼朝は、天下の罪人を臆面もなく恋う歌をうたうとは何事か、と怒った。それをなだめたのが政子であった。

「石橋山の戦で敗れたあなたが安房へ逃れられたとき、わたしはひとり涙にくれていました。あのときのわたしの気持と、九郎殿を慕う静の気持に

宮城の
れ村の
故石

5

れだけの違いがありましょう」

そこで頼朝も機嫌をなおし、静に衣を与えてそ舞いを賞したという。そのとき静が舞ったのがこの社殿だというが、当時は石段上の社殿はまだてられておらず、現在の舞殿のあるところに本があったらしい。

＊鶴岡八幡宮本宮(上宮)・拝殿＊（いようぐう）

祭　神＝応神天皇・仲哀天皇・神功皇后・比賣大神

一一九一(建久二)年に若宮八幡社が火災に遭って焼失したため新たに石清水八幡宮から御神体をお迎えして祀ったのが、この上宮で、若宮(下宮)とは祭神が異なっている。江戸時代までは「八幡宮寺上宮」と呼ばれていた社殿で、現在の社殿は一八一四(文政十一)年に徳川幕府十一代目の将軍・徳川家斉が造営したもの。総朱塗りの権現造りで、社殿手前には左右に護身像を置いた楼門があり、周囲に回廊をめぐらしている。

＊鶴岡八幡宮宝物殿(回廊)　なお、この回廊は現在、神輿など鶴岡八幡宮の数多くの社宝を陳列した宝物殿となっている。

＊丸山稲荷社＊

本殿西の山を丸山といい、その山の上、もと松ケ岡明神という古社があった跡地にある稲荷社で、「流れ見世棚造り」の社殿は、室町時代中期の建造物で、鶴岡八幡宮境内の建造物の中で最も古く、「国指定重要文化財」になっている。

なお松ケ岡明神は別名を「地主明神」という。それは鶴岡八幡宮上宮が建つ前は、ここ松ケ岡に鎮座していた明神で、鶴岡八幡宮上宮にその地を譲ったところから(　　)名である。

＊若宮神社(下宮)＊（げくう）

祭　神＝仁徳天皇・履仲天皇(宇治皇子)・仲哀命(久麗)・磐之媛命(宮麗)　(仁徳帝の皇子と姉妹)

本殿へ昇る石段の東にある神社で、一一八〇(治承四)年十月に源頼朝が、材木座一丁目の元八幡を遷して、ここ鶴岡八幡宮の起こりとした神社で、そのときの社殿は一一八一(養和元)年に武州浅草(東京都浅草)の工匠が招かれて建造したものだという。そのときの社殿には回廊があって、一一八六(文治二)年四月八日、源頼朝と政子夫人は、この社に参詣して、この回廊から、神楽殿で舞う静御前を見物したと伝えられ、また一一八八(文治四)年二月二十八日の臨時の流鏑馬も、この回廊から見たと記録されている。現在の社殿は北条氏綱が再建した室町時代末期の様式を伝える権現造りの本殿・幣殿・拝殿がある。

＊白旗神社＊

祭神＝源　頼朝・住吉大神

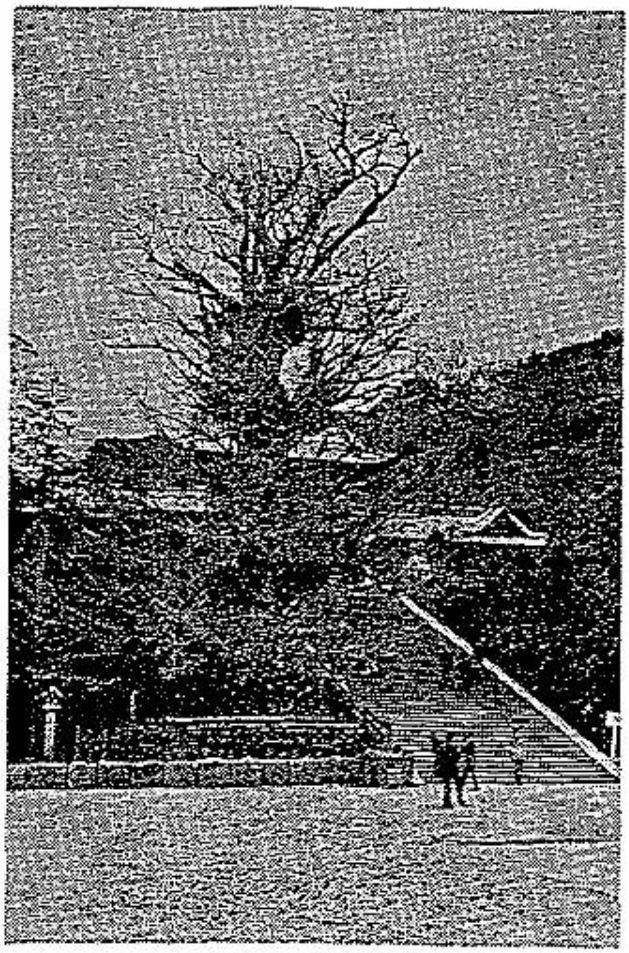
若宮神社の東の社殿がそれで、頼朝の木像を祀っており、頼朝の子で鎌倉幕府二代将軍を継いだ頼家の創建である。

一五九〇(天正十八)年七月に豊臣秀吉が鶴岡八幡宮に参詣したとき、この神社に参拝し、頼朝の木像の肩をたたいて「天下ヲ草ニ結リシハ足下ト我レトノミ、足下ト我レトハ天下ノ友ダリ」と云ったという逸話が伝えられている。

＊源実朝と、その歌碑　鎌倉国宝館の南に一つの歌碑がたっている。源実朝の生誕七五〇年を記念して一九四二(昭和一七)年八月に、鎌倉ペンクラブの人びとが建てたもので、次の歌が刻んである。文字は、藤原定家が筆写した実朝の歌集『金槐和歌集』から取ったものである。

山はさけうみはあせなむ世なりとも
(　　)君にふた心われあらめやも

承久元年（一二一九）一月二十七日、三代将軍実朝の右大臣拝賀の礼が神殿で行なわれた。あいにくとこの日は、積雪二尺という悪天候になった。暮れやすい冬のそれも夜になって退出、下までわずか十数段の石段を残すところまできたそのとき、袿を頭から被った阿闍梨公暁が、このイチョウの蔭からおどりでて実朝を刺殺し、首を刎ねた。公暁は俗名善哉といい、祖母北条政子のために伊豆に幽閉され、修善寺で謀殺された二代将軍頼家の子、そしてその政子のはからいで建保五年（一二一七年）六月二十日、八幡宮別当に任ぜられたまだ十八歳の少年であった。



鶴岡八幡宮の大銀杏

公暁はただちに後見人である備中阿闍梨の雪の下の北谷の住坊におもむく。そこで三浦義村に使いを出して自分を将軍にするよう取り計らえと伝えた。ところが北条義時は、義村に逆に処分を命じた。義村の使いが遅いので、公暁は鶴岡八幡宮寺の後の山に登って、三浦義村屋敷に行こうとしたところで、長尾定景の手にかかり殺された。

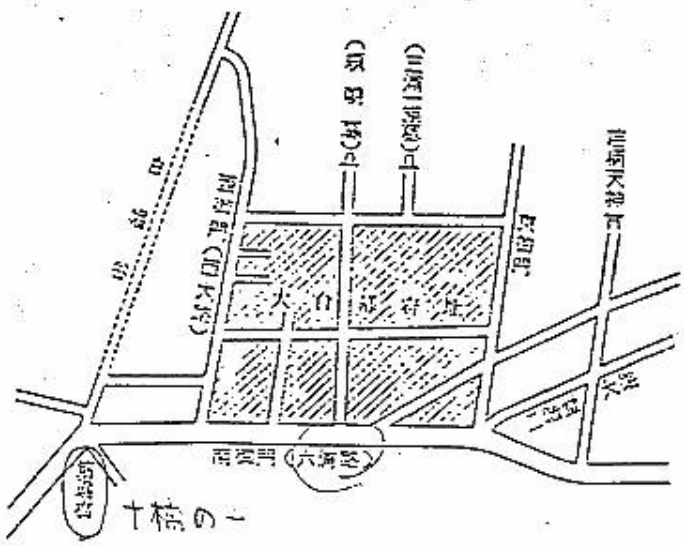
これで鎌倉源氏の正統はわずか三代・二十七年（頼朝が鎌倉入りをしてから三十九年）でまったく断絶した。それも最後の源氏を源氏みずからの手であやめ、権謀術数の罠におちて滅びてい

った。北条氏が心底深く謀っていた北条時代が、名実とものものになった。八幡宮寺もまた北条氏との関係を深めていく。

暗殺の怪　ところがこのときの状況を、別に説明するものに、つぎのようなのがある。公暁は衆にすぐれた武芸者であったというが、当日は錚々たる武将三十名が随行者とあり、正月拝賀のため、すべて武装はしていなかったといっても、公暁ひとりを防ぎ止められなかったものか。また一千余名の武装警護が配置についていたといわれるが、だれも手をだしていないようだ。まして公暁は首をもって、逃げこんだ先でゆうゆう晩食をとっている。追手は各所を探りまわったあげく、ようやく居所をつきとめた。召し捕りにゆくと、そこで公暁に加担する僧たちと一戦を交える。ここでも公暁は逃げてしまう。それからまたあちこちを探す。やがて公暁の外出をねらい、ようやく討ちとっている。だがこれよりさき、実朝を倒す祈願に八幡宮へ千日参籠をさせたり、別当の身で刀をさげた怪行動が許されたり、それに凶変でごったがえす石段で、武芸者といっても公暁ひとりで実朝の首を刎ね、しかも持ち逃げすることが可能だったかどうか。まして公暁逮捕に、わずか二キロ程度の行動範囲の鎌倉市内で、長時間をかけている。こうしてあれこれをみてくると、公暁のこの行動の裏には、黒幕の大物が策略をめぐらしていたことも考えられてくる。そこで公暁召し捕りも相手方との政治的折衝などで手間どった、と見るべきであろう、というのである。

しかし、公暁がイチョウの蔭にかくれて……という物語の記述は、江戸時代にはいってからはじめて現われてくることであって、あるいはこれは劇的効果をねらった後世の脚色ではあるまいか、ともいわれる。

さて大倉幕府の地で　　)が、これは大体北は法華堂の地、すなわち　　)の頼朝の墓のある岡の下を東西に引いた線、南は大倉路、いまの筋違橋から金沢に至る路の線、東は荏柄天神の西で、もとの二階堂大路の分岐点、関取橋のすぐ東から北へ東御門の方へ入る路があったが、その路の線、西は筋違橋から少しく東で、今の西御門へ入る道路が岡の下の道路に合する線、これらの線内の地である。東御門へ入る道と西御門へ入る道の間、すなわち東西の間口は南の線では約二七〇m、八百九十一尺、間数にして約百五十間、約二町半ということになる。この幕府の地は都市の制の戸主の制の丈尺(第十章参照)によったものではなく、農村の町段歩の制によったものであろうから、それでよかろうと思う。南北は約二町、二町半に二町の敷地であったと推定してよいように思われる。「風土記稿」が方六町ばかりとしているのは賛成できない。そしてこの郭内には寝殿(治承四・一二・一二の条)対屋(建久二・七・二八の条)大御所(建仁三・九・六の条)小御所(寛和元・五・二四、建久三・九・一〇の条)常御所(建保四・四・九の条)などがあり、東西南北におのおの門があった。今日の東御門・西御門の地名はこの屋敷の東門・西門のことで、そこには道路が通じ、諸士の屋敷があったのである。



大倉幕府址想定図

頼朝の法華堂はこの幕府の北門外の一段と高いところ、今の頼朝の墓があるところであったらしい。「吾妻鏡」嘉禎元年十月二十日の条に、将軍頼経の御所を法華堂の下の地に定むべきか、若宮大路に定むべきかについて陰陽師に占わせたところ、法華堂の前の地は西の方に岳があり、その上に頼朝の廟がある。その親の墓が高くてその下に居れば子孫がないと

本文(何の本文か分明でない)に見えている。頼朝には子孫がない。これは本文と符合するといったとある。これは法華堂の所在と大倉幕府の所在とを語るものであって、法華堂がいまの頼朝の墓のあるところであることは殆んど疑いない。ここからは今でも瓦などが出るという。この法華堂は建保元年五月和田合戦のとき朝夷奈義秀が御所を焼いたがこの堂は無事であった（このとき実朝はここに逃れ、政子は北門を出て御所別当坊に入った）。しかし覚喜三年十月の大火で焼失したので十一月に再興された。宝治元年六月の三浦合戦のときは、泰村以下三浦の一族はここに籠って自殺している。

頼朝の墓はどこにあったか分明でない。しかしどうも法華堂の地でよいように思う。

大蔵幕府跡　●八幡宮東鳥居から徒6分　東西およそ二町半(約二六〇㍍)、南北およそ二町(約二二〇㍍)の敷地の中に、寝殿、対屋、大御所、小御所、常御所、その他多くの建造物があった。

治承4年(一一八〇年)、鎌倉入りした頼朝は、父義朝の故地である亀ガ谷に邸宅を営もうとしたが、すでに義朝の菩提をとむらう堂宇が建っており(☞)、また、土地も手ぜまだったので断念した。ついで選ばれたのがこの地であった。2カ月後には竣工し、頼朝は上総介千葉広常の邸より移った。以来、寿永元年(一一八二年)までの46年間、武家政治の中心となり、頼朝、頼家、実朝の源家3代はこの大蔵館に住み、政子はその後もとどった。

源実朝は幼名を千幡といい、源頼朝が征夷大将軍になった一カ月後の一一九二(建久三)年八月九日に、将軍の次男として生まれ、兄の頼家が一二〇三(建仁三)年九月に修善寺に幽閉されたあとを承けて鎌倉幕府三代将軍になった。ところが政治の実権が北条氏にあったため文の道を選び、『新古今和歌集』の撰者藤原定家と親交を深めて和歌の道に励み、一二一三(建保元)年に『金槐和歌集』を著している。年わずかに二二歳のことである。このように公家(貴族)の気風を志向して官位を望み、右大臣にまで昇進したが、それを大江広元に諫められると、日本での生活を諦めて中国大陸への渡航を計画し、宋の陳和卿を鎌倉に招いて一二一六(建保四)年一一月に由比ケ浜で大船の建造に着手した。しかし此の海岸が遠浅だったため大船を浮かばせる工夫が着かず、翌年四月、ついに断念した。若宮八幡宮での実朝の不慮の死は、じつに、その二〇カ月後のことである。

この 大蔵御所で 起こった こと……

◎大姫の悲しい恋

寿永3（1184）年4月21日の朝はやく、この大蔵御所から女装して逃れ出たひとがいました。それは木曽義仲の息子・清水冠者義高（しみずのかんじゃ・よしたか）です。義高（13才）は父・木曽義仲が頼朝に差出した人質であり、頼朝の長女・大姫（7才）の婚約者でもありました。

その年の1月、父・義仲は範頼・義経の鎌倉勢に近江粟津ヶ原にて討たれています。その子・義高をどうするか、これは頼朝にとっても難題だったことでしょう。

人質として当然に処刑してしまうのか、情けをかけて生かしておけば、父の敵として狙われることになる。しかし何といっても自分の娘婿ではないか。

その結論を出すのに3か月かかったのでしょうか、やはり処刑されるらしいという噂が高くなって、大姫は必死に義高を助けたいと母・政子にすがったことでしょう。

警護の侍たちの目をくらまして、大姫の外出というシナリオだったのか、とにかく脱出は成功しました。

いるはずの義高の身代わりに海野小太郎幸氏が一人二役でお芝居をし、政子や大姫も懸命にこれをささえたのでしょうが、ついに頼朝は騙されたことを知りました。烈火のように怒った頼朝はすぐに追跡を命じます。

義高はどこへ逃げようとしたのでしょうか。祖父・帯刀先生義賢のゆかりの地・大蔵館（埼玉県嵐山町）だったのかも知れません。逃げる義高、追う頼朝の家来。いまの狭山市、入間川のほとりで、義高は捕らえられ、即、首をはねられてしまいます。

それを聞いた大姫の気持。愛するひとが、父によって殺されるという悲劇。7才のこころはそれに耐えることはできませんでした。

生来、病弱だった大姫は、その後、明るさを失った「女の子」となってしまいました。父のすすめる貴族一条高能との縁談は「強いておおせられるなら、身を投げて死ぬ」と拒みつづけ、さらに後鳥羽天皇の妃に…と策略する父に逆らって、自ら衰弱していった彼女はついに建久8（1197）年7月14日、20才で亡くなりました。この大姫の幼い恋の舞台が、ここ、大蔵御所の地でした。

◎熊谷直実の一途

熊谷直実といえば、平家物語「敦盛最期」では清盛の甥・敦盛を討ち、そのことから無情を感じて仏に帰依することになったという話で有名です。

他にもいろいろと彼の一途さを示すエピソードがありますが、建久3（1192）年11月25日の出来事は、この大蔵御所の地で起きたことでした。

この日、彼とその叔父・久下直光との領地争いの裁判がここでありました。頼朝の直接の質問に「くちべた」の直実は答えられないことが多く、腹をたてた彼は訴訟の文書をつかんで投げすて、自ら「もとどり」を切って御所を飛び出してしまったのです。こんなことがおこったのも、ここ、大蔵御所の地でした。

来迎寺（らいごうじ）〔満光山　時宗　西御門一―一一―一〕

八雲神社の前の階段をあがると左にお堂がある。開山は一遍智真で本尊は来迎印阿弥陀如来及両脇侍像で江戸時代正徳二年（一七一二）に造像されたものである。本尊の右に地蔵菩薩坐像、左に跋陀婆羅尊者立像、別間に如意輪観音坐像が安置されている。

地蔵菩薩坐像〔木造　彩色　玉眼　一三一・〇　宅間法眼浄宏作　南北朝時代永徳四年（一三八四）県指定文化財〕

定印を結び宋風の法衣垂下式で岩座にのる。男性的なひきしまった面相、豊感ゆたかな体軀をしている。胸前に裳の結び目をみせている。台座より両側に法衣を垂らす様式は鎌倉時代後期より室町時代にかけて、鎌倉地方を中心に流行した南宋や元の時代の仏像の様式の像で、頂相像（禅宗の祖師像）の衣の様式とも共通している。この像は西御門にあった上杉能憲創建の報恩廃寺の本尊で、その後法華堂をへて明治の初め廃仏毀釈の運動にまきこまれて来迎寺

62 木造如意輪観音像　来迎寺

に移されたといわれる。仏師浄宏は鎌倉仏師で埼玉県飯能市法光寺地蔵菩薩坐像至徳三年（一三八六）を造っている。

跋陀婆羅尊者立像（木造　彩色　玉眼　一一二・五　室町時代　市指定文化財）

首をややかしげ両手で杖をつく。彫りは深いがやや硬い面相、厚くかんじられる着衣をつけた像で、江戸時代は自休像ともいわれていた。旧報恩寺像で法華堂をへて来迎寺に移された。跋陀婆羅尊者は大宝積経にみられる跋陀婆羅菩薩とも、十六羅漢中の跋陀羅尊者とも考えられ、禅宗では沐浴も修行の一つであるとして浴室に祀ると書かれている。画像は多いが彫像は珍しい。

如意輪観音坐像（木造　彩色　土紋　玉眼　九七・五　南北朝時代　県指定文化財）　口絵⑥

宝髻を高く結い、下ぶくれの面相に写実的な目鼻立ちをし、体軀の肉取り豊かで隙には二重の裳が垂れ、衣文は複雑に刻まれ裳の上に花文・輪宝文の土紋を置いている。この像はもと如意輪堂にあったものが法華堂に移され来迎寺に祀られるようになったといわれる。

如意輪観音には天平時代よりの二臂像（奈良岡寺・滋賀石山寺像）と弘法大師請来の六臂像（大阪観心寺像）がある。この観音の六臂の腕一つ一つが六道を救済するという信仰が平安時代中頃よりおこっている。鎌倉地方には密教像が少なく如意輪観音像としては光明寺像とともにすぐれた作である。ただ石造の如意輪観音像は寺院の墓地に墓石として彫られた像が地蔵菩薩像や阿弥陀如来像とともに多くみられる。

この観音像のやさしい顔を仰いでいると去り難い気持ちにさせられる。

寺内には旧法華堂の手水鉢や室町時代の五輪塔・宝篋印塔がみられる。

星また消ゆ・三浦一族

安達館は今の甘縄神明社の東側にあった。由比ヶ浜大通り、バス停長谷の海岸通りにある消防署と、道を距てた反対側である。甘縄神明社は、社伝によると神亀年間（七二四―二九）の創建といわれるから、藤九郎盛長がここに邸をかまえた時には、すでに長谷の鎮守の役目を果たしていたことだろう。安達勢はここから疾風のように若宮大路に出て、八幡宮の赤橋を渡り、今の横浜国大附属中学校のところにあった三浦館におしよせた。

幕府と安達勢の連合軍を悩ましたが、昼頃になって突然風の向きがかわった。つまりそれまでの北風がにわかに南風となり、寄手はこの風を利用して、三浦館の南側の人家にいっせいに火を放った。炎はいっそう風を呼ぶ。そして燃えさしの木や布が風にのって三浦館の屋根に落ち、そこから瞬時にして炎は海のようにひろがる。眼にしみる煙は防ぎ矢の的をも見さだめ得ない。やがて総崩れになった三浦一族は、泰村を中心に法華堂めざして後退する。法華堂は今の頼朝の墓の下にあり、泰村はここでもはや天運の尽きたことを知った。

一方、光村は八十騎を率いて永福寺まで後退し、ここで決戦の陣を布くために兄泰村と一族を招き寄せようとしたが、泰村はすでに覚悟の態で、幕府の創立者である頼朝の墓前で死にたいという。

三浦氏系図

互いに語るはつい昨日までの繁栄の夢ばかり。夢さめた今は、せめて誉れ高い三浦武士の名に恥じぬようにと、やがて一門の毛利西阿入道が声高らかに念仏をとなえる。西阿入道とは三浦泰村の妹婿で、この朝も甲冑をつけ北条に駈けつけようとするのを、妻の言葉で思いなおして三浦勢に加わっていた。声高に念仏をとなえる心境には、さだめし複雑なものがあったろうが、それに和して堂内の全員が合掌し、思い思いに刃を我が身におしあてた。念仏に和する声が一人、二人と減るたびに、辺りにうつ伏した屍が重なり、堂の床は血の海と化してゆく。

光村も自害するべく胸おしひろげたが、このとき愛する妻の肌の香がかすかに鼻をくすぐった。光村は出陣に際して妻と小袖を交換し、互いに来世までもと誓ったのだ。無双の美人だった妻の頬に、水晶よりも光る涙が滂沱として流れていたのを、いま鮮やかに思い出す。かくて三浦一族二百七十六人、郎党たちを合わせると五百人余の屍が法華堂の内外を埋めつくしたのである。

それにしても幕府はかなり慌てていた。遍よく法華堂はそのまま残ったものの、三浦一族の中でも反北条の急先鋒だった光村と、同じく泰村の弟家村の屍が見当たらないのである。すると三日後、この惨劇の一部始終を天井の隙間から覗いていた法華堂の一人の法師が召し出された。彼は三浦勢の不意の闖入に逃げ場を失って天井裏にかくれたもので、その証言によると、光村は敵に顔を見られたくないといって、自ら刀で顔の皮を削りとったところ、その血が頼朝公の画像にまで飛び散ったという。なればこそ光村の屍には誰も気づかなかったのだ。また多くの者が、敵に首を渡されないために法華堂に火をつけることを主張したが、泰村がそれを許さなかったという。泰村は頼朝の遺徳をけがすのを怖れたのであろう。そして泰村は、三浦一族がこの悲運にあったのも、亡父義村が多くの者を死罪にした報いであって、北条氏も必ず今にその報いを受けるのであろうから、自分としてはいまさら北条一族を恨む気はないと言ったという。

正治元年（一二九九）一月十三日、頼朝が死んだ。前年の建久九年十二月稲毛重成がその妻の冥福を弔めるために相模川に橋を新たに造った。そしてその供養を行ったが、この重成の妻は頼朝の実政子の妹であった。そこで頼朝は結縁のためこの供養に参列して橋を渡ったが、帰り路に落馬した。そしてこれがもとで病気となり、ついに死んだのであった。時に年五十三であった。

通説としては、稲毛重成の亡き妻（政子の妹）の追善供養に造った相模川の橋供養に出かけた帰りに落馬し、余病を併発して死去したとしている。『吾妻鏡』の頼朝死去記述の欠脱は、故意に執筆しなかったとする説もあって、永遠の謎である。

『新古今和歌集』の編纂者として、著名な歌人の藤原定家の日記『明月記』によれば、「所労（病気）」、それも「頓病（急病）」というのみで、病名ははっきりとされていない。南北朝時代の『保暦間記』や、江戸時代の『盛長私記』によれば、橋供養の帰途に、稲村ヶ崎のあたりで、かつて亡ぼした義仲や義経に平家の怨霊が海中から浮かんで出て悩まし、そのために落馬し、死亡の原因となったとある。

『見聞私記』や『温古随筆』『武家俗弁説』によれば、女装して女の所に忍んで来た頼朝が、宿直の近習の士に斬られたとあるし、また、それは政子の命令であったともいっている。

『公益俗弁』によると、壇ノ浦で死んだと見せかけた平教経が、橋供養の際に、女装で襲い、頼朝に重傷をおわせ、それが原因で死亡したとある。

近江家実の日記『猪隅関白記』によると、正月十八日の条に「飲水重病、去十一日出家」、廿日の条に「去十三日早世」とある。飲水とは今の糖尿病で、これに怪我や腫物等の余病が併発し

て、死亡したのであろう。

いずれにしても、頼朝が正治元（一一九九）年一月十三日に五十三歳で没したことには違いない。あれほど偉大であった頼朝の、死亡時の記録が伝わっていないということは、すでに各種の記録体制が完備していた鎌倉幕府のあり方としては、非常に不可解な謎である。

安永八（一七七九）年に島津重豪によって改修された石造層塔の頼朝の墓（国指定史跡）を見つめていると、立証すべき何の史料も残っていないが、もしかして、北条氏による間接的暗殺ではなかったのかと考えられてくる。即ち、『吾妻鏡』の頼朝の死亡記述の脱漏こそ、北条氏の陰謀を守るために計画的に行なわれた証拠だと言えはしないであろうか。今では永遠に歴史のミステリーである。

タブの水の下　頼朝の守り本尊・もとより観音さまつゝ持仏堂と法華堂となる

伝大江広元墓・伝島津忠久墓　●頼朝墓から約2分　頼朝墓のすぐ東の山腹続きにある。横穴の中に大江広元（※下欄）、その子季光（長州毛利家の祖）、島津忠久（※下欄）の墓という五輪塔がある。島津、毛利の両氏は頼朝の墓のかたわらに祖廟を設けることによって、それぞれの祖先を顕彰したのであろう。忠久の墓前に島津重豪が建てた由来碑がある。薄暗い窟内には五輪塔が並び、それにはおびただしい小石が供えられている。この山腹には、三浦一族墓と伝えるやぐらもある。

※大江広元と毛利氏

広元は、頼朝の招きで下向、公文所別当、政所別当を兼ね、家務を預かり、幕政に深く参与した。頼朝死後も北条義時、泰時を助けて北条執権独裁体制確立に寄与した。

その第4子季光は、相模毛利荘の地頭職となって毛利姓を名のり、関東評定衆の重職についた。宝治合戦のとき、妻の兄三浦泰村に組して三浦一族とともに自殺した。

江戸時代を通じて長州を領した毛利氏は、この季光の子孫だと称した。

※源頼朝と島津氏

江戸時代、薩摩を領した島津家の祖忠久は、母が比企能員の妹丹後局という。一説には頼朝の落胤だともいう。いずれにせよ、鎌倉初期に島津荘の地頭、薩摩、大隅、日向三国の守護となる有力武家であった。

荏柄神社

二階堂字荏柄七四番地にあり。祭神、菅原道真。相殿に八雲大神（須佐男尊）ともと二階堂の鎮守であった熊野三社神（伊弉諾尊・伊弉冊尊・天照大神）とを祀る（『菅公一千年祭記』）。例祭七月二十五日。元村社。二階堂の鎮守。境内地一七四四・七六坪。本殿・神門等あり。宮司、岡田実。社伝には長治元年の勧請と伝える。もと別当は一乗院であった。

『相模国鶴岡社交易帳』と『倭名抄』の荏草郷がこの辺であることについては『総説篇』第一章を参照。

参道は鶴岡から鎌倉宮に通ずる新しい道のため両断され、新しい道と金沢街道までの間は殆んど利用されない。街道に接して立つ石鳥居には明和五年の銘があるが、笠石・貫などが脱け落ちたままになっている。

社伝では、源頼朝が当社を六倉屋敷の鬼門の鎮守としたという。

日本の神々でもっとも人気のあるのは八幡、天神、稲荷で、この三神で日本の神社の八割を占めている。全国約八万社あるうち、天満宮（天神）は約一万社に上る。

天神ともいわれる菅原道真が亡くなったのは延喜三（九〇三）年二月二十五日。二月は梅の月である。梅と天神の関係は天神の神紋が梅であり、境内に多い梅の木は道真が生前に梅を愛したからだといわれる。

神奈川県内のおもな天神には鎌倉・荏柄天神社（一一〇四年創始）が広く『吾妻鏡』の時代から知られている。横須賀・久留浜天神社（一六六〇年創始）は三浦半島の八十七ある神社のうち唯一の天神様でもある。横浜・永谷天満宮（一四九三年創始）は江戸時代、本尊像は江戸城に入り将軍家治の拝観を受けたといわれている。さしあたってこの三社が相模国の三大天神といってもよいだろう。

菅原道真は、承和十二（八四五）年六月二十五日学者の家に生まれたといわれる。昌泰二（八九九）年、藤原時平の左大臣に対して右大臣となった。しかし道真の栄進をねたむ者が多

く、政権と学派の争いのなかで延喜元（九〇一）年、時平の中傷によって大宰権帥に左遷された。太宰府の榎寺で謹慎二年の後、没し、死後「学問の神」とあがめられるようになった。だが真相は、道真は先帝宇多上皇とひそかに図って藤原時平に対抗しようとしていた。宇多上皇は天皇在位当時、藤原氏の勢力を抑えて天皇親政を実現しようと図り、布石として道真を登用した。道真は蔵人頭から参議・大納言と昇進し、宇多天皇の側近として活躍した。次の醍醐天皇にも道真は重用され、時平とともに内覧に任じられ国政に携わった。

宇多上皇は帝位を醍醐天皇の弟・斉世親王に譲らせようと計画したとされる。その計画の中心人物が斉世親王の夫人の父親・道真であった。もしこれが成功していれば、道真は新天皇の外戚となって天下を自由にできたであろうが、クーデターはならなかった。道真のめざましい昇進は藤原氏と一部貴族の反感を買い、九州へ左遷された。道真の死後、宮中では次々と不幸な出来事が起こった。醍醐天皇はノイローゼから衰弱死、時平一族とその派の道真を追放した面々は次々と不幸な死に方をし、道真の祟りとされた。そうした不穏な時期に時平の弟・藤原忠平が対抗馬として突然名乗りをあげた。これらは菅原道真公の祟りであると喧伝し、時平派を神経戦に追い込んだ。忠平は道真を「正義の文人」として世の中に定着させる影の立役者となったうえか、政権まで兄時平から奪い取ることにも成功した。ちなみに、この忠平の妻は道真が実子同様にかわいがって育てた姪であった。

かくて道真は没後二十年で神として祀られた。延長元（九二三）年罪を取り消され、後に正一位太政大臣を贈られ、京都・北野神社に学問の神となった。道真は初め雷神や疫病神として恐れられたが、鎌倉時代になると、慈悲の神仏として「学芸、文学の神」となった。

鎌倉宮

二階堂字四ツ石一五四番地にあり。東光寺旧跡である。俗に大塔の宮ともいう。祭神、護良親王。例祭八月二十日。元官幣中社。単立宗教法人。氏子なし。境内地四二六一・一六平、本殿・中門・拝殿・神饌所・渡廊・制札・手水舎・本殿玉垣・社務所等は渡廊・制札等を除き、いずれも明治二年四月創建当初のもの。大正大震災後復旧工事は昭和二年から四年にかけて終了している。

境内に摂社二、南ノ方を祀る南方社、村上義光を祀る村上社がある。

また、明治六年四月、明治天皇行幸の際建築された行在所（現在その一部を宝物展示場に使用）があり、このほか御窟前玉垣・荒垣・第一鳥居左右玉垣・神札授与所・警衛詰所・湯殿・倉庫・使丁詰所・公衆便所等がある。宮司（本務）、内山義一。勧請は明治二年二月、明治天皇の仰により建立、同年七月二十日、御羽車宮中を出発、鶴岡神主宅を仮神殿として一泊、翌二十一日鎮座。

東方理智光寺旧殿の山頂には、宝篋印石塔があり、明治十一年、護良親王の御墓と決定され、宮内庁の所管となっている。また、理智光寺にあった御位牌は、もと浄光明寺の慈恩院にあったといい（『風土記稿』）、明治三年十月二十二日、東慶寺に移された。

本殿裏に護良親王が幽閉されていたと伝えるいわゆる土牢がある。『新編鎌倉志』にも大塔宮土籠とみえているから、この伝えは貞享以前からのものとわかる。しかし大塔宮が幽閉されたところが土の鎌倉牢であったことは既に明かにされている。（『鎌倉攬勝考』『風土記稿』）

護良親王は度々尊氏を襲撃しようとされたらしい。六月七日にはその風聞があって尊氏は大兵をもって守って事なきを得たという。親王の尊氏打倒の考えには後醍醐天皇も内々は賛成しておられたようである。ところで尊氏の方では親王の計画についてのっぴきならない証拠を握ったらしく、それで天皇に迫ったような形跡がある。鎌倉へ流すというのも尊氏の要求を容れたものではないかと思う。

七月高時の遺子北条時行が諏訪頼重に推せられ、信濃に兵を起して武蔵に入った。直義

は渋川義季・岩松経家らを遣わしてこれを女影原・小手指原・府中などに防いだが敗れ、ついで自分から出ていって井出沢に戦ったがまた敗れた。そこで鎌倉に帰って護良親王を殺し、成良親王を奉じて千寿王をも伴って三河に走った。時行はこれと入替って鎌倉に入った。

通説によれば、後醍醐天皇の第十皇子の護良親王は、建武二（一三三五）年に鎌倉二階堂の東光寺で足利直義の手の者によって斬殺された。首塚は、理智光寺谷の東方山上にある。また、位牌は明治三年に東慶寺に移されている。親王を祀る鎌倉宮は、明治二年に出来上がったもので、明治十一年、正式に親王の墓所と決定されている。

鎌倉の苦寺として有名な妙法寺の境内にも護良親王の墓所がある。これは、妙法寺を再興した五世住持の日叡上人が親王の遺子であったためであろう。今でも鎌倉宮からは年二回、宮司が妙法寺の墓所に参り、妙法寺からは住持が鎌倉宮と理智光寺谷の墓所の参拝を行なっている。

異説によれば、足利直義の家臣渕辺義博は親王を斬ろうとして斬れず、その代りに親王の衣服の一部を切って足利直義に示し、首は藪の中に捨てたと報告した。そして、渕辺は同士をかたらって建武二年七月二十二日夜、ひそかに親王を奉じて海路を逃れ、奥州石巻に上陸して、長く親王に仕えたといわれる。その後、親王は、後醍醐天皇に遅れること十一年目の正平六（一三五一）年九月に奥州で死去した。埋葬地には一皇子大明神として奉祭し、陵墓として今に伝えているのである。

そして親王の鎌倉脱出に供奉したのは、日野、日下、比羅塚、福原、遠山、高橋、岡本、渕辺の八氏で、脱出計画の張本人渕辺氏は文化の頃に絶えたが、日野と、日下の子孫は今も続いている。

永福寺伽藍の想像復原図(原図は木村春美氏)。

永福寺跡

●鎌倉宮から徒歩4分

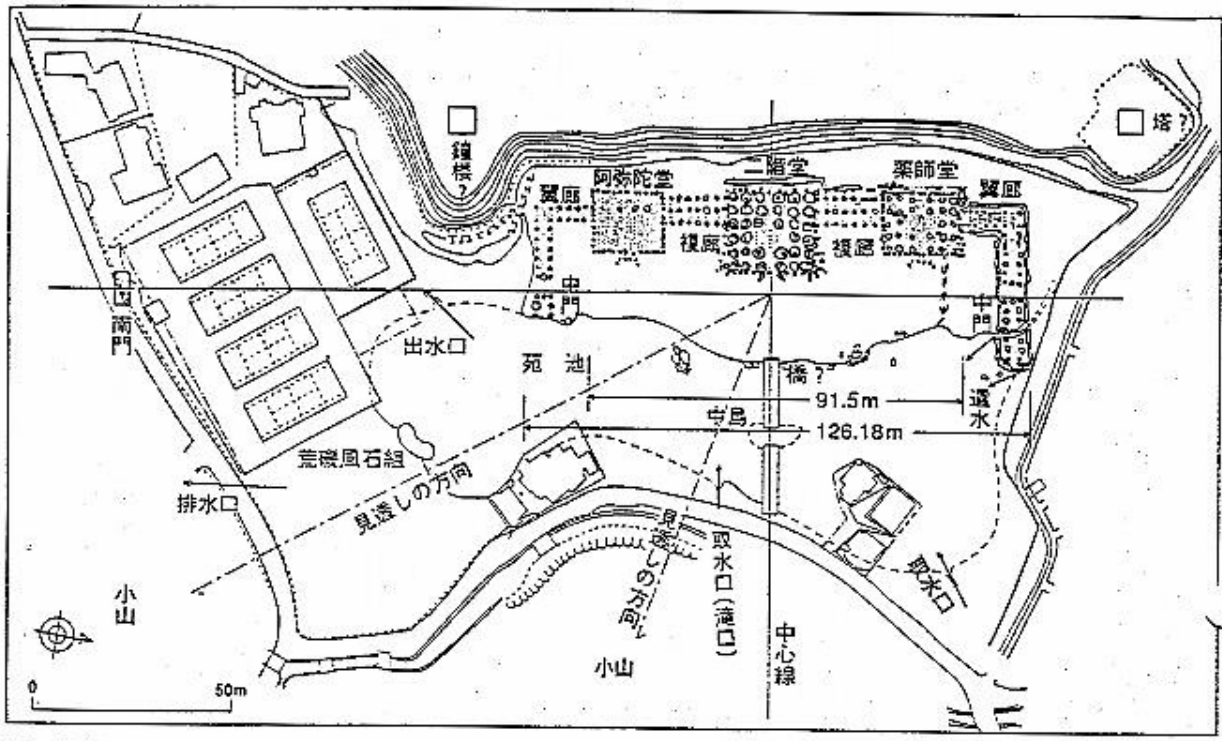
絵図によるとテニスコートのあたりに総門があり、それを入ると左の山裾に多宝塔、中央に本堂の二階大堂、その左右に脇堂の阿弥陀堂と薬師堂、その前面には広大な苑池がひろがり、中に中ノ島を築き、脇堂から渡殿が延び、岸には池にかかって釣殿がある。背後の山腹には鐘楼、薬師堂、三重塔が建つという壮麗な一大寺であり、西ガ谷、亀ガ淵には僧坊があったという。

いまはこうした姿を想像するのはむずかしい。総門の礎石があったことにちなむ四ツ石、本堂、脇堂にちなむ三堂などの小字が残り、永福寺旧蹟碑の近くの1㍍余の巨石は「吾妻鏡」にいう畠山重忠(↓156ページ下欄)が怪力で運んだ石だろうか。その近くの雑木のあたりは中ノ島であったらしい。山裾には礎石と思われる大石もあちこちに見られる。荒れはてた跡地には、いま、四季おりおりの花がみられ、晩秋にはコスモスが咲き乱れている。

鎌倉初期の仁治3年(一二四二年)に書かれた「東関紀行」は、この感懐を次のように描写している。「鳳の甍日に輝き、鳧の鐘に響き、楼台の荘厳より始めて、林池ありとに至るまで、殊に心とまり侍る。この一文を読むにつけて、この一文を読むにうかべて跡地を見ると、廃墟がことのほか味わい深い。

○歴史メモ　源頼朝は奥州藤原氏を討滅し、覇権を確立すると、平泉で見た二階大堂大長寿院を模して造立したのがこの寺である。源義経、藤原泰衡をはじめ数万の怨霊をしずめ、三有の苦果を救うとともに、権力を誇示する意図もあったと思われる。文治5年(一一八九年)起工、建久年間(一一九〇年代)に竣工している。

50年ほど後には鎌倉5代執権北条時頼の努力で大修理があり、元弘3年(一三三三年)には鎌倉幕府を倒した新田義貞が、足利尊氏の嫡男、後の室町2代将軍義詮を伴って滞在した。室町初期の応永12年(一四〇五年)炎上の記録の後、衰えてしまったらしい。



178　永福寺の伽藍配置図　「雲軒月殿、絶妙比類無」と記された大建築の全容が、発掘調査によって明らかにされた。鎌倉市教育委員会提供の原図による。鎌倉市二階堂。(南門・塔・鐘楼・橋・中島・取水口・出水口は未調査のため位置および規模は推定。苑池の範囲で破線部分は未調査のため推定)

にかいどう　二階堂氏　鎌倉・室町時代の文官を輩出した豪族。藤原氏南家伊東氏流。伊豆国(静岡県)出身で、工藤氏から分流し、狩野氏と同族。初代行政が鎌倉の永福寺別名、二階堂近くに住んだことから二階堂氏を称した。行政は鎌倉幕府の政所別当に任じられ、建保六年(一二一八)長子行光が政所執事に補せられて以来、行盛・行泰と、子孫は代々この職を世襲している。鎌倉幕府の文官として重用され、幕府の重職を占めた。政所執事のほか、評定衆・引付衆・諸奉行人や将軍家御所内の番衆に列せられたものは北条氏について多い。鎌倉幕府滅亡後も建武新政府に文官としての才能を認められ、雑訴決断所所衆として登用された。室町幕府も鎌倉幕府の政所制度を踏襲し、頭人としての執事は、当初、二階堂氏がほとんどこれを占めたが、十四世紀末ごろには伊勢氏に代わってしまった。盛時の所領は相模・陸奥・三河・伊勢・肥前・陸奥などの諸国に及び、その子孫・門流もそれぞれの地で繁栄した。

行政
- 行光
  - 行盛
    - 行泰
      - 行頼
        - 行能
    - 行綱
      - 行朝
    - 行忠
      - 行宗
      - 行貞
- 行村
  - 元行
    - 行氏
      - 行景
  - 行義
    - 行有
      - 行藤
        - 時藤
        - 貞藤
          - 兼藤
  - 行久
    - 行清
  - 行方
    - 行章
      - 行員
    - 行氏
  - 維行

瑞泉寺

錦屏山と号し、開山は夢窓疎石、開基二階堂道蘊（どううん）、中興開基足利基氏。臨済宗円覚寺派に属する。

瑞泉寺のある谷は紅葉谷（もみじがやつ）というので、山号の錦屏山（きんぺいさん）はその名をこの谷の紅葉の名からとったものである。

開山の夢窓疎石は法弟春屋妙葩が撰した『年譜』によると、伊勢の人、宇多源氏の出身で、母は平氏、建治元年（一二七五）に生れた。弘安元年（一二七八）母方の一族に紛争が起きたので家をあげて甲斐に移った。この年疎石は母を喪っている。弘安六年（一二八三）父に伴われてその地の平塩山寺に出家、一八歳のとき南都に赴き東大寺戒壇院に登壇受戒した。二〇歳の時甲斐を出て紀州由良の西方寺（のち興国寺）の法燈国師無本覚心に参じようとしたが、途中京都で知人の徳照という僧に逢い、「叢林に在ってその規矩を学ぶべき」ことを忠告されて初志をかえ、建仁寺に赴き、住持の無隠円範に附くことになった。無隠は蘭渓の弟子である。ここから鎌倉禅林への道がひらけ、永仁三年（一二九五）には建仁寺を辞して鎌倉東勝寺に無及徳詮に参じ、たまたま東勝寺が火災に罹ったので建長寺に移った。この後建長・円覚及び京の建仁寺に、大覚派（蘭渓道隆の法系）の人々に参じて修業した。疎石という法諱は『年譜』によると、永仁二年建仁寺に無隠円範に参じたときのこととするが、はじめは智曜といい、のち自ら疎石と改名したものではないかといわれる。（玉村竹二氏『夢窓国師』）

鎌倉の執権北条高時も疎石を静かにさせては置かなかった。嘉暦元年には疎石は鎌倉に帰り、二階堂に南芳庵を建てて住んでいたが、高時の懇請のために、翌年二月（一三二六）に浄智寺に入っている。疎石が瑞泉院を南芳庵の北に建てて移ったのはその年の八月、五三歳の時であった。これが瑞泉寺の発端である。

翌年にはここに観音殿及び山頂に徧界一覧亭を建てたが、元徳元年（一三二九）高時に請われてやむなく八月円覚寺に入り、翌年九月円覚寺を退き、甲斐に慈林寺をひらき瑞泉院との間を往復しているうちに幕府の滅亡（一三三三）を迎えた。

境内は梅林になっている。本堂の後が庭であるが、前述のように岩山の裾を削って作られた一二坪足らずの小さいもので、不規則な形と岩盤そのものをもって池岸とし、石橋一つと板橋一枚をかけ地盤と同じ岩塊をその傍と池畔に配置し、また池中にも一個を置いただけの簡素なものである（神奈川県指定史蹟）。江戸時代以後滝口を作ったり、池の向うに祖元の青石碑を立てたり、岩壁の一部を削り取ったりしている（『鎌倉歴史散歩』瑞泉寺の項（赤星氏の文））。また池の右方に一本石の宝篋印塔が一基置かれているが、これは前住が背後の丘を越えたところにあるごぼうヶ谷のやぐらから運んできたものである。鎌倉としては最も古い様式のものであるが、九輪と蓮座はここに移されてから補ひ足したものでこれは新しい。（赤星氏前掲文）

池の向うから岩壁を彫り削って急な石段があり、之を登ると雑木林の山腹に出、更に幾曲りかして仮尾根にでると宝形造の建物がある（昭和十年建立）。これが現在の備界一覧亭である。住職大下豊道師。

さて、翌嘉暦三年に上述の通り観音殿及び備界一覧亭が建っているが、またこの時期に庭も造られ、しばしば天下の名衲を会して詩会を催した。疎石には造園の才があり、天龍・西芳・慈林等いづれも名園でないものはない。ここの庭が疎石の作かどうか確証の有無を知らぬが、後の山から泉水をひいて岩盤をうがつた池に水をたたえたもので、赤星直忠氏は南北朝のものであることは間違いないといわれる。（最近県の史蹟に指定された）

瑞泉寺と貉塚

（関東十刹の一）

（鎌倉の五山筆頭）にあげられる、花の寺で著名な錦屏山瑞泉寺から訪れたい。この瑞泉寺は嘉暦二（一三二七）年、夢想国師の開山になり、当時は瑞泉院といった。南北朝時代に足利尊氏の子の基氏が中興して以来、関東公方の墓所となり、足利基氏は、この寺号を法名としたのである。

現在、登高禁止になっている裏山の金屏山の頂上には、遍界一覧亭があり、当初のものは、国師が五十五歳の時に出来上がり、鎌倉五山を中心とした禅僧たちが、ここに集まって詩文を作り、風景を愛でたといわれる。現在の亭は、昭和十年に再建されたものである。

また、瑞泉寺には、珍しい伝説や歴史が残っている。山門を入ると、左側に、土まんじゅうを盛りあげたような上に、ささやかな自然石を立てた塚があるが、これを絡塚という。

絡塚の伝説は、夢想国師が瑞泉寺を創建して間もない頃のこと。国師の徳をしたって近隣の人はもちろん、近郊近在から法話を聞きに善男善女が集まった。その中に、どこに住んでいるのやら、名前は何と言うのか、里人の誰も知らない年老いた男が一人いた。この老人は、法話のあるたびに一度も欠席せず、国師の説くところを一語も聞きもらすまいと、熱心に聞いていた。「感心な男がいる」と、国師もその男に気がついた。熱心だという以外に、何ら普通の人と変わるところがなく、ただの里人にすぎなかった。ところが日がたつにつれて、集まって来る中の誰かが、「あれはムジナだ。人間に化けているのだ」と、言った。噂は次から次へと伝えられ、法話を聞きに集まる者全部に広がった。「あのムジナはこの山に住む古ムジナで、長年の間、人を化かしたり、畑を荒らしたりして、我々里の者を困らせた奴に違いない。今に尻っぽを出すぞ」と、言う者もいた。

しかし、国師は里人の噂を知ってか知らずにか、別に気にとめている様子もなかった。ムジナといわれる男も、自分に対する噂は全く知らないような顔で、説話に耳を傾けているばかりであった。里人の中には、何とかして化けの皮をはがしてやろうと相談する者もいた。そのうちに、皆は誰が殺したか判らないように、だまして殺す方法を考えた。お盆にあと二、三日という七月十日のこと。里人たちは餅をついて、その中に小石を入れ、その男にご馳走したのである。悪企

みを知らない男は平気で食べて「ごちそうさま」と、礼を述べた。翌朝になると瑞泉寺の庭に、齢百を越したろうと思われる大きなムジナが死んでいた。そして、その日からの話の席に噂の男は姿を見せなくなった。

国師はムジナの死を悼んで、庭の一隅に埋葬して、ねんごろに弔ったのである。また、餅に石を入れて食べさせた旦人も自分たちのいたずらの過ぎたことを悔み、かつ師の前に懺悔して、そのムジナの埋葬を手伝い、立派に土まんじゅうに盛りあげて供養した。そして毎年旧七月十日の命日がくると、旦人たちは揃って墓参りをし絡施餓鬼を盛大に行なったのである。

現在の寺には、かつての華やかな古い建物は何も残っていない。たぶん、この絡塚の話が最も古いものといってよいのであろう。

◆どこも言地蔵

もと扇ガ谷智岸寺谷の地蔵堂に安置されていたが、大正5年に寄進された。あるとき、貧しさに耐えかねた堂守が、よそへ逃げだそうとしたとき、地蔵菩薩が夢枕にたち「どこもどこも」といって消えた。八幡宮の供僧に話したところ、「どこへいっても苦しいのは同じ」とさとしたのだといわれ、以後、まじめに堂守をつとめた、という。

◆夢窓疎石

鎌倉末期から南北朝期の、臨済宗の高僧。建長寺の一山一寧に参じ、浄智寺の高峰顕日の法を継いだ。三浦半島、上総などに隠棲したが、後醍醐天皇の招請で、京都第一の禅寺、南禅寺に住し、翌年、北条高時の招きで浄智寺にはいるとともに瑞泉院の開山となった。2年後、円覚寺第15世となるが、翌年には退いて甲斐に恵林寺を開創。その3年後には鎌倉幕府が滅ぶが、以後も多くの京都禅刹の開山に迎えられている。室町将軍家の信任も厚く、政治的にも手腕を発揮し、弟子も多く、それらは夢窓派とよばれ、禅宗界の中枢となった。

芸術的才能にもすぐれ、とくに作庭に長じ、多くの寺に伝わる。京都西芳寺の庭はその代表として名高い。

こけでら

鎌倉時代略年表

1147	（久安 3）	源頼朝生まれる
1180	（治承 4）	源頼朝挙兵、鎌倉へ入る。大蔵館建設　鶴岡八幡宮遷座
1184	（寿永 3）	大姫の婚約者・義高殺害さる
1185	（文治 1）	平家滅ぶ
1186	（文治 2）	静の舞い
1189	（文治 5）	奥州藤原氏討伐。永福寺起工
1191	（建久 2）	遷宮
1192	（建久 3）	源頼朝、征夷大将軍に。鎌倉幕府を開く　直実の裁判
1194	（建久 5）	源頼朝、久伊豆神人喧嘩に二階堂行光を遣わす
1197	（建久 8）	大姫死す
1199	（正治 1）	源頼朝死す
1200	（正治 2）	寿福寺建立
1203	（建仁 3）	比企一族滅ぶ
1204	（元久 1）	源頼家の死
1205	（元久 2）	畠山一族滅ぶ
1213	（建暦 3）	和田一族滅ぶ
1219	（建保 7）	源実朝、公暁に殺害さる
1225	（嘉禄 1）	政子死す
1247	（宝治 1）	三浦一族滅ぶ
1249	（建長 1）	越谷・建長板碑造立
1327	（嘉暦 2）	夢窓疎石、瑞泉院を建てる
1333	（元弘 3）	北条一族滅ぶ
1335	（建武 2）	護良親王殺される
1869	（明治 2）	鎌倉宮創建

三　由比の浜を右に見て、
雪の下通り行けば、
八幡宮の鳥居

四　上るや石のきざはしの
左に高き大いてふ、
問はばや、遠き世世の昔、

五　若宮宮の舞の袖、
しづのをだまきくりかへし
かへしし人をしのびつつ。

鎌倉

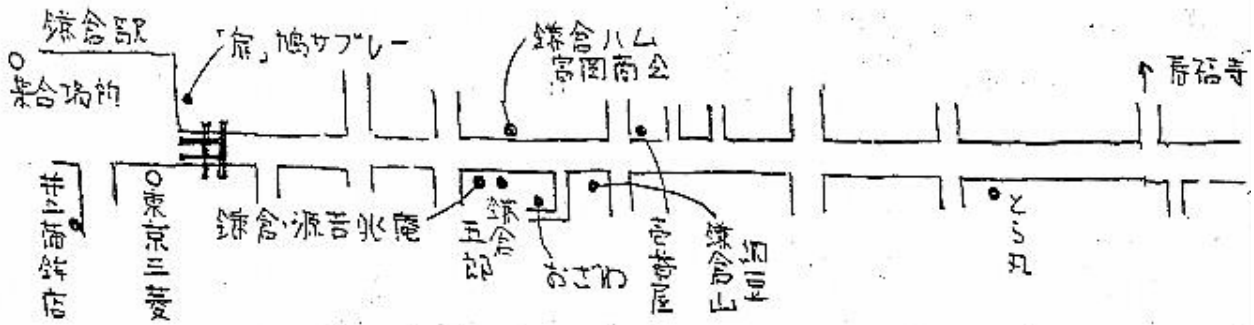
七　八幡宮の石段に
立てる一木の大銀杏樹
別當公暁のかくれしと
歴史にあるは此陰よ

八　こゝに聞きし頼朝が、
幕府のあとは何かたぞ
松風さむく日は暮れて
こたへぬ石碑は言あをし

鉄道唱歌

参　考　書

○鎌倉市史・総説編　昭和３４．１０　鎌倉市史編纂委員会編　鎌倉市刊
○　〃　　社寺編　　〃　　〃　　〃
○北条政子　永井路子著　９０．３　文芸春秋刊
○炎　環　　永井路子著　Ｓ５３．８　光風社刊
○鎌倉　三上　進著　Ｓ４０．１　学生社刊
○歴史と旅・特集・鎌倉の史話５０選　Ｓ５９．４　秋田書店刊
○中世都市鎌倉－遺跡が語る武士の都－　河野眞知郎著　９５．５　講談社刊（講談社選書メチエ）
○鎌倉（交通公社のポケットガイド）　Ｓ６０．１　日本交通公社出版事業局
○交通公社のるるぶ情報版　横浜鎌倉湘南　Ｓ６３．１　日本交通公社出版事業局
○集英社版日本の歴史⑦武者の世に　入間田宣夫著　９１．１２　集英社刊
○小学館日本の歴史５　鎌倉と京　五味文彦著　８８．５　小学館刊
○相模三浦一族　奥富敬之著　９３．７　新人物往来社刊
○「吾妻鏡」を歩く　末広昌雄著　８８．３　岳書房刊
○続「吾妻鏡」を歩く　末広昌雄著　Ｈ２．１　岳書房刊
○全訳吾妻鏡別巻　貴志正造編　Ｓ５４．４　新人物往来社刊
○鎌倉武士物語　今野信雄著　９１．５　河出書房新社刊
○鎌倉の仏像　武藤晟造著　Ｈ１．１　真珠書院刊
○鎌倉の仏像文化　清水真澄著　８５．２　岩波書店刊
○鎌倉八幡宮（しおり）　鎌倉八幡宮社務所
○国史大辞典　Ｓ５８．１０　吉川弘文館刊

鎌倉のお土産のヒント

◎やっぱり＜鳩サブレー＞か。若宮大路の本店より鎌倉駅前の和風茶房「扉」１階で。
◎二軒並んだ和菓子屋さん「鎌倉・源吉兆庵」か「鎌倉五郎本店」で和菓子。
◎井上蒲鉾店の＜蒲鉾・梅花はんぺん・小判揚げ＞。
◎とら丸の＜お茶漬けの素＞。
◎鎌倉といえば＜鎌倉ハム＞は富岡商会で。
◎「おざわ」の玉子焼き（１，０５０円）の入った黄色い紙袋もいいですね。
◎せんべいの町・越谷から鎌倉へきて「壱番屋」の「べっちゃりせんべい」を買う。
◎鎌倉山納豆で「納豆」を選びませんか。